
魔法少女リリカルなのは-The generation of new face

チング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - The generation of
new face

【Nコード】

N0417S

【作者名】

チング

【あらすじ】

少年は知らなかった、自分の持つ力を…だが、その力の存在を知った時物語は始まる

魔法少女リリカルなのは - The generation of
new face 始まります

ただいま予告のみ、本編は4月から

本編開始しました

魔法少女リリカルなのは - The generation of new f

こついう二次創作は初めて書くので、文章は滅茶苦茶かもしれませ
んがどうか温かい目で見てください

魔法少女リリカルなのは - The generation of new f

「何？この修羅場・・・」

いきなりの修羅場、迷う少年

「思い出せ、記憶メモリーのライブラリで検索しろ」

少年は記憶巡り

「持つべきは友！まずは友達に連絡だな！」

答えを得ようとする

「え？人が1人もいない・・・なんで？何処へ行ったの？」

無人の世界で少年と少女が出会った時、その物語は始まる

「そんなモノ意味ないって証明してあげる、奔れ聖槍之矢！一撃必
中、救世主セイバーステスの死！」

『The savour's death!』

「管理局に入局しろ、これは命令だ」

理不尽な要求

「魔法の力があるってんなら僕に答えろ！」

抗おうとする

「お父さんの2度目の死を、人々の記憶から消えることは避けたい」

少年は父の2度目の死を恐れ

「僕に力を貸して」

『I c a n n o t b e d o n e』

「何で!？」

魔法の力を得る為の目標を得る

「君のお母さんが使っていたデバイスについて知りたい？」

「お母さんのデバイスを知ってるの？」

「いや、知らない」

「ふざけんな！」

情報を得ようとし

「管理局の機密を簡単に調べるなよ、ばれたら減給ものだぞ」

そして知った情報

「た、高町教導官お久しぶりです！」

2人の再開、それは人と人をつなげる

「ロストログア・ヒュギエイアの杯、返還を承認します」

1つのロストログアを巡り

「最近、調子が悪いんだ・・・」

最初はただの不調だと思っていた

「ウガアアア！」

事態は瞬く間に大きくなり

「管理者」と凍結させるべきだ」

管理局が揺れ動く

「止まって、お願い！」

みんなの気持ちが1つになる

The generation of new face
2011年4月より公開予定

魔法少女リリカルなのは - The generation of new f

予告編ってどこまで出してOKかとか考えると難しかったです。

邂逅（前書き）

4月1日に投稿できるよう、予約投稿を使ってみま
す
週1投稿が目標です

邂逅

少年

「何？この修羅場・・・」

目の前で起こっている非日常を目にした時、学生服を着た小柄な少年は、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった

ー10分ほど前・・・瀬木駅改札前

少年

「あれ？財布がないだと・・・それはマジでやばいって、どこでなくした？思い出せ、記憶のライブラリで検索しろ、古市ユウリ！」
僕・古市ユウリは駅の改札前で1人混乱していた。学校の帰りに、電車に乗ろうと定期を出そうとしたら、定期の入った財布がなかったユウリ（以下ユ）

「これはピンチ！定期がない、財布がない、つまりは全く金がない！家までは少なくとも電車で30分+徒歩10分はかかるのに歩いて帰ると・・・かかる時間は6時間、それ以上？ムリだな・・・却下！ならば、持つべきは友！まずは友達に連絡だな！」

とりあえず、電話をかけようと携帯を取り出すが・・・ボタンを押してもうんともすんとも言わない

ユ

「あれ？電源入んない・・・バッテリーは入ってる、なら充電が切れてるのか・・・僕ったらうつかりさんだな。って、落ち着いて考察してる場合か！なら学校に戻って、正一から電車賃借りるか。アイツ今日部活だから、まだ学校にいるだろうし・・・だけど、オカ

研に行くの気進まないな・・・なんか怪しいし・・・この前なんて
なんか変な儀式やってたし、正直変態の集まりなんだよな〜まあ、
今回はしょうがないよな！それに毎日どっかの部活に助っ人に行っ
てるからオカ研行かなくて済むかもだしね」
と僕の高校に入ってから1番の親友、津久野正一つくの しょういちを頼ろつと、部活
で学校に残っている彼の元へ向かって走りだした。学校へ向かう途
中、生徒があまり歩いていない車道を走りながら女子生徒を見て思
ったのだが

（もう、うちの学校の女子の制服、新入生がブレザー着てる姿を見
れるのも今年で最後か・・・）

というのも去年の生徒会が女子の制服を変更するとか言い出して、
ブレザーは今年の新入生までで来年の新入生から黒のワンピース型
になるからなんだが・・・どうでもいいけど制服をセーラー服にし
ようという派閥もあり一悶着あったりもした

（だけど、なんでワンピース、セーラー両陣営とも男子主導で活動して
いたのかな？）

なんて、考えてるうちに通学路の坂を登り終え校門の前にたどり着
いた

私立瀬木学園高校、それがうちの学校の名前だ。創立82年かなん
からしい、どうでもいいが・・・あと、坂の上にあるからかあまり
人気はない。だからか、受かりやすいと一部の秀才や、残り大多数
の体力バカにしか人気がない為、頭は平均するとあまりよくない。
しかし、上位層はトップクラスの国公立にさらりと受かってみせる

という偏差値的に低ランクにいるのがよく分からない学校だ。ちなみに、僕はどつちつかずな位置にいる受かりやすいから組の下位層だ・・・とてもじゃないが、この坂を全速力で走って登るなんて真似はできない。今もかなりゆっくり、だいたいジョギング程度のペースで走っている。そう考えると、毎朝全速力で走ってこの坂道を登ってる体力バカ組はかなりすごいんだね・・・正一は体力バカ組なのに勉強もできて学年トップクラス、天は二物を与えた・・・だけど、オカルト研究同好会に入っているなど趣味に問題があるので全くモテない。趣味が変わればモテるのに、正一はかなりもったいことしてるね・・・とか言いつつ恋愛とかそんなの僕の守備範囲外だけどね〜

ユ

「しかしいつ見ても、でかい門だよな・・・」

ふと、足を止め門を見上げる。うちの学校の校門はなんかムダにでかい、ただ単に僕の背が低いからってのもありそうだけど・・・なんでも82年前から変わらずここにあるらしく、なんかの重要文化財に指定されてるらしいけど、文化財だっという実感が全くもって湧かないな・・・門をくぐろうとするとふと何か違和感を感じる。

何といえいいのか分からないけど・・・甘ったるいような、胸焼けのするような甘さというか・・・その感じを何だろうと疑問に思いつながらくぐるとそこは明らかに非日常的な異様な景色が広がっていた

ユ

「え？人が1人もいない・・・なんで？何処へ行ったの？」

そう、校門をくぐる前にはたくさんいた人間が一瞬で1人残らず消えていた。突然そんな状況になると当然のように僕はパニックを起こす

ユ

「みんな、どこいったの？ねえ、返事をしてよ！お願い！」

そう喚きながら半泣きになっていると、僕の言葉に答えるかのよう

に中庭の方から何か物音が聞こえてきた

ユ

「よかつた〜中庭に誰かいるんだ、ビックリさせないでよ。」

と、物音は内心さっきの違和感と関係あるんじゃないかと怯えながらも、中庭へ多少の期待を抱いて走っていくと、そこはさらに異様な光景が広がっていた

ユウリ

「何？この修羅場・・・」

そこには身長5mほどの化け物がいて、うちの学校の制服を着た少女に襲いかかろうとしていた。少女は銀色の髪の毛をポニーテールにしている、手に何かを持ったまま化け物をにらみつけ対峙して動かない。一方、化け物のは鬼のような見た目の黒いやつで、手には馬鹿でかい剣を持っていた、だけどそれは剣よりも鈍器といった方が正しいかもしれないような大きさだった

化け物

「ぐるる、ギヤアアアス！」

化け物はうなると、咆哮をあげて少女に切りかかる。その時、僕は少女が切られるのを見たくないから目を離したかった、少女の次に襲われるのは自分だと思いその場から逃げ出したかったけど、体がうまく動いてくれなかった。しかし、僕の悪い予想は少女によって良い様に覆された

少女

「瞬歩！」

少女は叫ぶと高速で移動し、残像を残しながら化け物の攻撃をギリギリ回避する。化け物も攻撃を当てようと剣を振るうが少女はそれを紙一重でかわす。しかし、避けては後ろに下がっていくという

「まさかさあ、アンタ私の攻撃手段が近接戦特化の槍だけだと思っ
ていないよね？それなら、そんな甘い考えは早めにぶっ潰さないと
いけないよね？ロンギヌス！フォームチェンジ、アーチャー・フォ
ーム！」

『Form change, archer form！（フォーム
チェンジ、アーチャーフォーム！）』

少女の手には弓と槍握ると、少女は何を思ったかいきなり弓の弦に
槍を掛けた

ユウリ

「え？あの娘もしかして、槍を矢代わりにするのかな・・・けど、
普通そんなことするっけ？」

正直僕は少女の行動が信じられず、僕は一瞬まさか少女がこの状況
に気が狂いでもしたのかと思った・・・しかし、そんな僕の思いと
は裏腹に少女は真面目な顔をして弓の弦を引く。その足元には銀色
の正六角形の模様が浮かび上がっている

鈴

「そんな障壁全く意味がないって証明してあげる、奔れ聖槍之矢！
一撃必中、救世主の死！」
セイバーステス

『The saviour's death！（ザ・セイバーステ
ス）』

槍は風を切り裂き空中を駆ける、その前に砂や小石など無力に等し
く、砂や小石ははじき飛ばされ地面にめり込む、それほどまでに槍
の持つエネルギーはすさまじい・・・そして槍は化け物までの道を
切り拓き、ここまでくるともうどちらが化け物か分からないが、槍
は放たれた勢いそのままに化け物の左の脇腹に突き刺さる
化け物

「があああああ！」

化け物は痛みあまりか膝からガクリと崩れ落ちる

鈴

「これで終わりよ！カートリッジ・ロード！」

『Cartridge Lord！（カートリッジロード！）』
槍から薬莖が吐き出される

鈴

「爆ぜろ！爆槍碎弾、ブレイクボンバアア！」

『Explosion！（爆発）』

少女の声に反応して止めとばかりに槍が爆ぜる。そして化け物は絶叫とともに左胸に大きな風穴が空くほどズタボロになって、ピクリとも動かなくなった

鈴

「おつかれさまロンギヌス・・・あともうちよつと、最後の封印だけお願いね？」

『OK, mama! Mode change, sealing mode! Start sealing！（分かりました。モードチェンジ、シーリングモード！封印開始！）』

そついい終わると、化け物は少女が手に持つ槍に吸い込まれていき跡形もなく消えていった・・・そして、少女はいつの間にかまた制服を着ていた。何だろつ、テレビとかで見る早着替えてて訳じやなさそつだし、魔法みたいでなんか不思議だな・・・

鈴

「終わったねロンギヌス、おつかれさま」

『Thank you. By the way, mama, there is a student who is not staff.（ありがとうございます。ところでマスター、局員でない生徒がいます。）』

鈴

「え？嘘・・・でもどうして結界内に一般人が？」

『Let me see, he may have his gr eat talent of magic.（）』

多分、彼は魔法のすごい才能を持っているのかもしれない」

鈴

「そうなの？魔力の資質のある人は誰でも自由に結界内に入れるんだ・・・なら、隠れて魔法の練習とかしてる時に資質のある人が入ってきちゃうこともあるかもなのね。これからはその辺りもしつかりしないよね。まだ、魔法と出会ってからそんなに経ってない無知な私がマスターでごめんねロンギヌス。」

『No problem, ma'ma! (問題ありませんよ、マスター)』

何か、少女はロンギヌスと呼ばれる何かと話しながら納得するように頷いているようだけど、いったい何なんだろう？それにさっきの槍とかも何なのか分からないし・・・そこで僕は危険はもう去っただろうと思い、少女に近づいて行き話しかけて、さっきの化け物や変身について尋ねようとした

ユ

「あの〜、ちょっといいかな？」

鈴

「ぎゃあああああ！」

ーどかつー

急に話しかけられて驚いたのだろうが少女は鋭い肘打ちを放つ、その肘打ちは狙いすましたかのように僕の鳩尾にクリーンヒットした

ユ
「ぐふっ・・・」

鈴

「あれ？もしかしてきれいに決まっちゃった？わあ、ごめんなさい！ごめんなさい！本当にごめんなさい！」

少女は必死に謝るがそこで僕は意識を手放し暗闇に落ちていった、古市ユウリ16歳高校2年、桜の花びらがヒラヒラと舞う温かいあ

る春の夕方のことだった・・・

ホームルーム
瀬木学園HR

ユウリ

「はじめまして、古市ユウリです。始めました、瀬木学園HR」

ドンドン、パフパフー

ユウリ

「このコーナーでは本編に登場するキャラを招待、雑談します。第
一回のゲストは？」

……

……

……

…

正一

「みんな、はじめまして津久野正一だ。本編では名前だけしか出て
ないがよろしくだ！」

ユ

「第一回のゲストは、瀬木学園2年が誇る文武両道の天才、僕の親

友津久野正一です！！」

正

「で、何について話すんだ？」

ユ（カンペ見ながら）

「ネタバレとかならないように、昨日のメールの内容についてだつて、恥ずかしいな・・・」

正

「昨日のメールか・・・確か、最初は内分の公式教えてだったっけ？
 $(na + mb) / (m + n)$ のやつ」

ユ

「で、それがだんだん $y = \log_{1-x} 1-x$ の微分とか学校で習ってないことについてお互いに出題しあうようになって・・・でも、正一はすごいよね！全部ちゃんと答えてたじゃん」

正

「いや、正直 $y = -1 / (1-x)$ ってたわてて $y = 1 / (1-x)$ にしてしまいそうになるんだ。慌てるとケアレスミスをしてしまう・・・そのせいで、1年の学年末は全教科満点を逃した！ちよつと修行してくる」

ユ

「いつちゃった・・・これからもこんな風にグダグダと続けていきます、よかつたら付き合ってください」

ユ

「では、また次回！次を目指してSTEP UP！」

邂逅（後書き）

主人公のデバイス登場はまだ先になりそうです、そして戦闘の描写は難しいです

オカルト研究会（前編）（前書き）

- 『ある日突然訪れた事態』
- 『一つのミスから始まった危機』
- 『違和感から繋がる非日常』
- 『そこには戦う少女の姿』
- 『そして、肘打ちから始まる非日常的な日常』
- 『魔法少女リリカルなのはーThe generation of new face 始まります』

オカルト研究会（前編）

鈴

「あの、河内かわち部隊長？」

河内（以下・河）

「なんだい、鈴？」

鈴

「この男子生徒のことなんですが・・・」

と指差す先には横たわる瀬木学園の男子生徒、古市ユウリの姿があった

河

「君の任せるよ煮るなり、焼くなり、実験動物にするなり、君の好きに使いたまえ」

鈴

「いや、さすがにそれは不味いですよ。それに罪のない民間人への魔力行使は管理局法的にも犯罪です！」

河

「けど、回復魔法は掛けても大丈夫だよ。それに鈴、君は武力行使したじゃん？って訳で頼んだよ、あと記憶も上手いように改ざんしといてね〜」

鈴

「あれは正等防衛です。それと、回復魔法って本気で言ってます？私が回復魔法苦手って分かってますよね？」

河

「まさか、僕にやれとでも言うのかい？」

鈴

「チート魔導師の部隊長なら何ってことないですよ？まさか、部

下の前で失敗するのが怖いんじゃない？」

と鈴は河内を挑発するが・・・

河

「そんな、安い挑発に乗る奴はいないよ？部下に実践の機会を与えるのも上官のれっきとした仕事だよ、狭山鈴三等陸士？」

鈴

「くっ・・・分かりました、やれば良いんですね？失敗した時はフォロー頼みますよ？」

河

「はい、はい」

そう、めんどくさそうに返事をする、近くにあった椅子に腰掛け、鈴を”監視”し始めた

鈴

「救世主の血を受け止めし聖なる杯よ、汝が力で傷つきし者を癒したまえ！救世主之奇跡！」

そう唱える足元には銀色の正六角形の魔方陣そこから命の水がユウリに浴びせられる

鈴

「ふう、珍しく成功したって、あれ？なんでなの、回復魔法が消えていく？」

河

「AMFか・・・珍しいね〜すごい、防御のエキスパートか・・・うちの部隊みんな攻撃特化ばかりだから、ちょうどいいね。この子うちの学校の生徒みたいだからうちの部隊にいれちゃおうか、いや表向きにはオカルト研究会か？だったら入部が正しいね。」

ユウリ（以下ユ）

「うーん、あれ？どこどこ？」

河

「目が覚めたかい？ここはオカルト研究会だよ、僕は顧問の河内天美だ、よろしく。ところで、うちの子が君に迷惑をかけたみたいな

んだ。」

ユ

「迷惑？正一が何かしましたか？」

河

「正一？ああ、津久野君のことか。まだこの学校に赴任してきて間もないから、生徒の名前も覚え中なんだよ。で、迷惑かけたってのは彼女だよ」

と、指差す先には中庭で化け物と戦っていた少女、僕に肘打ちをした少女が立っていた

ユ

「・・・」

鈴

「・・・」

お互い黙っていて沈黙がづらい

ユ

「あの！」

鈴

「あの！」

今度は同時に声を発してしまう

河

「ハハハ、二人とも息ピッタシだね。なんならこれから、コンビ組んでみるかい？」

ユ・鈴

「「お断りします！」」

河

「そうか・・・残念だ。ところで、君の名前は？」

ユ

「僕ですか？古市ユウリっています。」

その答えを聞くと、一人頷きながら

河

「ああ君がユウリ君か、津久野君からよく話をきいてるよ。ところで、オカルト研究会に入部しないかい？」

ユ 「遠慮しておきます。」

河 「そうか・・・だがね、君には入部する義務がある。」

ユ 「なんでですか？」

河

「なんと説明しようか・・・君は魔法つてあると思うかい？」
と、河内先生はバカみたいな質問をしてくる

ユ

「そういった、オカルトの類はあまり信じないですが、さっきの彼女を見たうえで、この質問・・・あるつて答えるしかないじゃないですか」

少し、苛立ちながらぶっきらぼうに答える

河

「物分りがよくて助かるよ、単刀直入に言う君には魔法の才能がある。だからオカルト研究会に、いや時空管理局管理外97番世界探索指定遺失物回収部隊に入ってもらいたい。詳しいことは、あとで津久野君に説明してもらおうよ、仲のいい友達に教えてもらうほうが気楽でいいだろう？」

(時空管理局？新足の宗教なのか？やつぱりオカ研は怪しいな・・・
これからは友達選ばなきゃ)

ユ

「あの、まだ入るなんて一言も言ってないんですが・・・」

河

「これは義務だ、強制だ！」

とかなり横暴なことをサラリと言う

ユ 「なっ、横暴すぎるだろ！ええい、僕に魔法の力があるってんならその力よ、僕に応えろ！」

そう、怒りに任せてテレビで見るような魔法の力をイメージする。そうしていると、なんか力が湧いてきた気がする

ユ 「うおおおおお！」

叫びながら魔力の玉をイメージするが、力はまとまらずに四方八方に飛び散る感じがする。それでも、その力の流れを無理矢理先生の方に向けようとする、力の流れが強すぎて制御できず力は凶暴なうねりとなり四方八方に襲い掛かる

河

「あー、魔力が暴走してるよ・・・しょうがない、ここじゃ危険だ。結界展開&転送！」

また化け物がいた時みたいな世界が広がり、いつの間にか僕たちは中庭にいた

「流・流・流・流・」

力のうねりが中庭の土をえぐる

河

「確かにすごい魔力だが、この程度デバイスは必要ないな・・・稀少能力『創造』クリエーション発動！形状はムチにしようかな？」

その声とともに先生の手には、ムチが握られていた

河

「風斬鞭蛇ふうざんべんじや！」

そしてムチを右腕を下手投げの要領で振る

「迅・迅・迅・」

ムチは風を切り裂き一瞬で音速を超えユウリの視認可能な速度を超えて、ユウリの体に巻きつく。そして、巻きつくと同時にユウリが感じていた力のうねりは消えていた

河

「うーん、ムチにAMFをまとわせるのもなかなかいいな・・・対魔導師相手にはかなり有効だ。おっと、部室に転送&転送完了後に結界解除しないとね。」

やはり、魔法つてのはあるみたいで河内先生足元に正六角形の模様が浮かびあがるといつの間にか僕らは部室にいた

鈴

「すごいです・・・先生の本気初めて見ました。」

河

「本気？なんのことだい？あんなの本気の1割も出してないよ？デバイスも使つてないしね」それに『能ある鷹は爪を隠す』っていうしね。」

どうやら、僕はとてつもなく恐ろしい化け物に喧嘩を売ったようだ・・・そりゃ、勝てるわけないよね・・・

(管理外97番世界探索指定遺失物回収部隊員全員に告ぐ、今すぐオ力研の部室に来ること！転送魔法の使用は許可する)

なんだ？いきなり、脳内に河内先生の声が響いた。

(これってテレパシー？これも魔法なのかな？なら、テレビに出てる超能力者も魔法使いなのか？)

なんて僕が考えていると、河内先生が僕の考えを見透かしたように

河

「今のは念話といって、まあ簡単に言うとテレパシーだ。だが、テレビなんかに出てる胡散臭い奴らの超能力とは別物だけどね。」

ユ

「今のは、読心術ですか？」

河

「いや、今のは君の顔を見ればわかったよ。君は感情が結構顔に出る方なのかい？それは将来働く時とかに不便だと思っよ？」

ユ

「そんなに顔に出てましたか？これからは気をつけます。」
なんて話していると

????

「『あんだ、生徒の前で転送使わせようとするな!!!』」
と3人の人間が駆け込んでくる、その中にはユウリが見慣れた2人の人物がいた、1人はもちろん才力研所属の親友・津久野正一、もう1人は本来この部に関係ないはずの・・・体育教師でありサッカー部顧問の石切ケンジ先生だ。あと1人は知らない生徒だ

正一（以下・正）

「って、あれ？ユウリどうしてここにいの？」

ユ

「な」（成り行きで）

そこまで言いかけて

河

「説明しよう」

となんかムダにテンションのあがった河内先生の声に、僕の声はさ

えざられる、そこまで新人の存在は嬉しいようだ

河

「なんと、彼は魔力を持っていたのだよ！この子に1年間接してきたはずの、うちの部隊員2名は気付いてなかったみたいだがね。来月の給与査定を楽しみにしていくことだ、バカ2名は悪い意味で、鈴は良い意味でね」

正一・ケンジ（以下 正・ケン）

「「そんなのあんまりツス！狭山はただでさえアンタのエコ鼻屑でかなりの給料もらっているのに、酷いっス！」」

河

「上官として、部下のミスを罰するのは当然だろ？」

正・ケン

「「パワハラだ！」」

河

「愛のムチと言いたまえ、これ以上反論するなら来月の給与査定をもっと楽しみにしていくことだ！」

正・ケン

「「すんませんでした」」

あわてて2人は土下座する。その勢いは地面に頭突きをするのでは？というぐらいで見えていて少し怖かった

河

「で、話を戻すが・・・鈴がオーガ種と戦闘中に結界内に彼・古市ユウリ君が侵入、これに関しては教育不十分つてことで戦技教導官の石切ケンジ陸曹長の給与を1割カットだ」

ケ

「うう・・・また今月もおかずなし・・・」

と泣き崩れ、そばで正一が慰めながら互いに給料少ない者同士の同盟を結んでいた

河

「で、戦闘終了後に近づいてきた古市君に驚いた鈴の肘打ちが古市

君にきまりここに運びこまれたってわけさ、質問は？」

と、いろいろはっしょったが河内先生はやり切った、という風なとても爽やかな顔をしていた

正

「なんで、ユウリは学校にいたんだ？いつも放課後は学校に残らずにさつさと帰るじゃん？」

と、ユウリと仲が良いからこそ知ってる情報を基に尋ねる

ユ

「実は定期の入った財布なくして、正一にお金借りようと学校に戻ってきた時に、巻き込まれたんだ・・・」

と、その答えに呆れたように

正

「ユウリお前、今朝の出来事忘れてるだろ？」

ユ

「今朝の出来事？」

正

「はあ、本気で忘れてるみたいだな・・・今朝、お前は「ズボンの後ろポケットに財布いれて椅子に座るとなんか座り心地悪いね」とか言って、財布を机の中に入れてたじゃないか・・・」

ため息をつき呆れながらも、正一は僕が財布を忘れた理由を教えてください。やっぱり正一は良い友達だ。みんなが高感度アップとかガチホモとかつぶやいた気がしたが気のせいだろう

ユ

「正一ありがとう、って訳で皆さんさようなら」と出口へ向かうと

ガチャリ

鍵の閉まる音がする

ユ

「え？」

????

「うふふ、せっかく入ってくれるかもしれない新人部員候補を逃がす訳ないじゃない。あつと、自己紹介が遅れたわね。私は才力研会長兼時空管理局管理外97番世界探索指定遺失物回収部隊、フォワードリーダーなんばいすず難波偉鈴よ。よろしくね、新人部員君！私は才力研の会長でもあるんだよ」

そこには、出るところ出て締まるところ締まった身体の顔は知らない女子生徒がいた。だが、僕は1つ腑に落ちないことがあり、鈴と偉鈴を見比べる

鈴

「ちよつと、今失礼なこと考えなかつたかな？」

とロンギヌスを構え”笑顔”で話かけてくる。だが、その目は笑ってなくて正直怖い・・・

鈴

「まあS・SDは使わないから、大丈夫ですよ。Holy Cross（聖なる十字）程度しか使わないんで、腕の中を槍が貫通して、脳天から股にかけても槍が貫通するぐらいだから」

ユ

「なら安心だね、ってなんでやねん！死ぬわ！」

河

「やっぱり、君たちいいコンビだね。ってわけでコンビ名は何がいかな？僕がマネージャーをやっつてあげよう。」

正

「反対！ユウリは俺の永遠の相方だから絶対にゆずらねえ」

河

「なら、ネタを披露してごらん？」

正

「分かった、やってやる！ユウリ、臨機応変に突っ込め！」

ユ
「うん、つてふえええええ！」

そこにこのタイミングを待っていたとばかりに
鈴

「その隙もらった！Holy Cross」

『Holy Cross』
ホリークロス

と槍を投げてくる。そのスピードはS・SDに近いもので、生身の人間に当たれば死ぬのは間違いなしの攻撃だ

ユ
「いやあああああ！」

恐怖のあまり鈴に背を向け縮こまる。その一瞬に動いた影があった、それはそうユウリのこと。性的な意味で好きな漢・津久野正一だ

正
「うおおおお！俺のユウリには傷一つつけさせねえ！」
と叫びながら正一が攻撃の前に飛び出したので、ユウリは正一のことだから何か考えがあるのだろう。これで安心、正一がどうにかしてくれると思っていると

ゴキッ

正
「む、無念」

正一は攻撃の前に屈したようだ。そして、ユウリは攻撃が来ると身構えるが・・・こない、恐る恐る振り返ると。緑色の正六角形の模様が槍の行く手を阻んでいる

鈴

「くっ、シールドか・・・だけど破る！カートリッジロード！」

『Cartridge Lord』
カートリッジロード

槍は空薬莖を吐き出すと更に勢いが上がる。だが槍はシールドを貫

くことはなく、鈴の手に戻っていった

ユ

「今のは・・・？」

僕は疑問に思い呟く、今の模様はいつたい何なのか・・・しかし、体の中から力がゴツソリなくなっただかと思つと強烈な脱力感に襲われ僕の世界は暗転した。古市ユウリ16歳高校2年、桜の花びらがヒラヒラと舞う温かいある春の夕方その日2回目のことだった。

・

ホームルーム
瀬木学園HR

ユウリ

「本編じゃ相変わらず寝てますが、古市ユウリです。まず最初に作者さん、何で僕って本編の最後に毎回意識失うの？」

チング（作者）

「ヘタレだからだが何かあるツスカ？」

鈴

「ペンギンさんだ！かわいいね〜」

チ

「鈴ちゃん止めるツス！ペンギンじゃないツス！プ〇ニーツス！」

偉鈴

「鈴ちゃん、動物園行こう？もっと多くの動物見れるよ、それにそのペンギンの視線がいやらしいし」

鈴

「お姉さまの誘いじゃ、断れません・・・バイバイペンギンさん」

チ

「いつちゃった・・・とりあえず、ユウリをどう弄ろうか？SLB、女装、ABPF、LON、テラスターetc・・・」

ユ

「ヘタレだからって理由になってないです！」

チ

「甘いな、もともとチョコレートを湯煎で溶かしたところに砂糖をこれでもかかってぐらい入れて、そこにスクラロースを山盛り入れてそれを眺めつつ飲むリンディ茶ぐらい甘いわ！」

ユ

「ちょっと待て！最初の二行ぐらい確実にいらなんでしょうが！」

チ

「ナイス突っ込み！ユウリ、君にこの称号を与えよう。」

ユウリは『突っ込みマスウーイン』の称号を手に入れた

ユ

「いらないですよ！それにマスウーインって若本さんか！」

チ

「ナイス突っ込み」

EXT

「いいぞ、もつと突っ込め〜」

ユ

「どうしてこうなったorz」

正一

「くおrくあwせdrftgyふじこ1p:~@:~」

チ

「出てきたところでもう終わりだぜ？まあ、放課後校舎裏こいや」

もつとも、だれもないがな、俺を含め」

ユ

「まあ、作者も正一もほどほどにね〜では、また次回！次を目指して」

一同

「STEP UP!」

背景

「変わり身の術、ここは今から校舎裏だ！」

チ

「（ ）>ナニイ」

正

「覚悟しろよ、この蟲野郎！速攻魔法発動、バーサーカーソウル！手札を（ry」

チ

「少年、君に絶望を与えよう。さっき、あえて使わなかったが・・・手札からバトルフェーダーを特殊召喚だ、これでバトルフェイズは終了追加攻撃はできない」

正

「orz」

チ

「バトルフェーダーとか大好きブルーノちゃん（ゴーズ）と対策して光神化からのクリスティアとかつてのも面白いと思っぜ、まあそのデッキじゃムリだしあきらめろ」

オカルト研究会（前編）（後書き）

すいません、新生活が始まっているいろいろドタバタしていたら更新忘れていました・・・これからは、新話が書き終わり次第順次予約投稿しようと思います

オカルト研究会（後編）（前書き）

- 『隠されたオカ研の正体』
- 『実在するといわれた魔法の力』
- 『力を使おうとするもうまくいかず』
- 『親友が魔導師と知って』
- 『使えた初めての魔法』
- 『魔法少女リリカルなのは―The generation of new face』

オカルト研究会（後編）

鈴

「今のシールド、めちゃくちゃ固かった。私でも破れないなんてこの人防御はかなり凄いです・・・」

河内（以下・河）

「ああ、今のは初めて使って魔力運用が分からずにかなり魔力を消費してみたんだけど、ちゃんと訓練すればかなりの強みに・・・」
2人はオカルト研究室に横たわる少年・古市ユウリを見て呟く

偉鈴（以下・偉）

「ところで鈴ちゃん、あんまり怒っちゃダメよ？せつかくの可愛い顔が台無しよ？」

鈴

「ごめんなさい、お姉様・・・これからは気を付けます。」

偉

「それに鈴ちゃんはこれから成長するよ、私が言っただから間違いないよ！」

鈴

「はい、ありがとうございますお姉様」

偉鈴が鈴を励ますが、この2人の後ろに百合の花が見えそうな雰囲気なのは気のせいだろうか・・・

ケンジ（以下ケ）

「なんつつか、この部活は特殊な性癖の持ち主が多いな・・・まあ、俺もあの娘に対して過保護な気もするから、人のこと言えないが・・・」
「
そう1人呟くとロケットに入った少女の写真を見る。写真の彼女もまた、部署は違えど管理局の局員である。写真の少女・堺舞花さかいまいか、彼女とそのメイド&執事兄妹がこの話に絡んでくるのはもう少しあとのことだが・・・」

閑話休題

ユウリ、正一が目を覚ましたことにより、再び説明が始まる

河

「ええと、管理局についてなんだが・・・簡単にいうと、この世界の警察や裁判所、軍隊とかいろんな組織が1つにまとまった組織だと思ってもらえるといいかな？で我々は管理外97番世界探索指定遺失物回収部隊といって、局内で管理外97番世界と呼ばれるこの世界で探索指定遺失物、通称ロストロギアと呼ばれる物を搜索、回収する部隊なんだ。ロストロギアってのは例えば神話に登場するアイテムのことで三種の神器とかのことだよ。ここまで質問は？」

ユ

「まず最初に1ついいですか、魔法使いはみんな管理局に絶対入るんですか？」

河

「ええと・・・みんなは入らない、いや入れない。しかし、試験に受ければ嘱託魔導師として関わることが出来る。まあ、うちでは魔

力さえ持っていれば、犯罪に使わないように監視がてら外部協力者としてしてから、一定期間を経てから入局させてる。津久野君も短期留学で休んだことあっただろ？その間ミッドチルダって管理局の地上本部のある世界の士官学校で学んで今じゃ立派な局員だ。鈴特殊なパターンで局員の親が直接教導したから士官学校には行ってない。君はまだ魔法に出会ったばかりだから、知識や魔力運用スキルがない。だからゴールデンウィークに勉強会合宿なんてやってみないか、どうだい？」

ユ

「はあ、でも参加していいかは“お母さん”に聞いてみないと・・・

レ

河

「お母さん？」

ユ

「あ、うち母子家庭なんです。僕がまだ小さいころにお父さんは仕事中に事故で亡くなって・・・」

河

「そうか、すまないね。辛い過去を思い出させるようなことを言うてしまつて・・・」

ユ

「いえ、大丈夫です。それに話をすることでお父さんがいたってことも忘れられないと思うんです。どこかで聞いたんですけど、他の人から忘れられるのが人の2回目の死だって聞いたことあるので・・・だから、お父さんの2回目の死を早くしちゃダメだと思っんです」

河

「古市君、君は強いね。そう考えるは結構難しいよ。君の年齢でその考えをするのはなかなか難しいからね」

河

「さっきの魔法の感じといい、お父さんが亡くなつたって話といい、

なんか古市先輩を思い出させるな・・・彼が先輩のご子息なのか？
しかし、先輩のご子息が今日まで魔法を知らないなんてことはない
よな・・・まあ、苗字の同じ他人だろ)

河

「で、魔法を使うにはデバイスと呼ばれる道具を使うことがかなり
多い。いや、使わなくてもさっきの君みたいに使うことは出来るけ
ど魔力の消費が激しいんだ。で、デバイスってのは魔法使いの杖だ
と思ってもらうとイメージはしやすいかな？まあ、杖の形をしてな
いのも結構あるけどね・・・その典型的な例が、鈴のデバイス聖槍
ロンギヌスだ。その彼女のデバイスは普段、待機状態のとき槍の飾
りのついたペンダントなんだが・・・君は普段何かアクセサリをつ
けてるかい？つけてるなら、デバイスをそこに組み込もうと思うの
だが」

正

「なら、ユウリいつも首にぶら下げてるお父さんの形見あるんザネ
？起動するたびに見るから、お父さんの2回目の死は防げるし」

ユ

「うーん、それもそうなんだけど、ちょっと抵抗あるな・・・それ
は最終手段ってことで置いときたいな。ってわけで、外してここに
置くね」

ユウリは稲妻をあしらったペンダントを机の上に置く

河

「なっ！」

ユ

「河内先生、このペンダントがどうかしましたか？」

河

(間違いない、これは古市先輩のデバイス、ライトニングだ。やはり、彼は古市先輩のご子息だ・・・)

河

「起きてください、ライトニング。私です、あなたのマスター古市遊馬の後輩、河内天美です。」

『OK, system name, Lightning star t! (わかりました、システム名・ライトニング起動) Amami, I haven't seen you for a long time. (天美久しぶりですね)』

ユ

「ええええええ、ネックレスがしゃべった！それもお母さんの声で！いったいぜんたいどうなってんの？」

そう、叫ぶとユウリは腰を抜かし床に座り込んでしまう。いつも首からぶら下げているネックレスがしゃべる、彼にとってはとてつもないショックだったのだろう

河

「あはは、何というか・・・君のご両親、古市遊馬一等空佐と古市恵美二等空尉は私の高校時代、そして管理局での先輩なんだ。さつきから、君の話を聞いていて遊馬さんの話に似ていて、少し気になっただけなんだ。で、遊馬さんは恵美さんにゾッコンだったんだ？ 見てるこっちが恥ずかしくなるほどにね／＼」

ユ

「お父さん、お母さんが魔法使い・・・そうだったんだ。じゃあ、デバイスはお父さんの形見のライトニングを使うのがいいのかな？」

お父さんを忘れないためにも・・・」

『I'm sorry, I cannot be done. (「うめんなさい、それは出来ません」)』

ユ

「え、何で!？」

河

「ああ、それは遊馬さんが特殊なんだ。彼は魔法に関しては右に出る者はいないような人だった。だから、魔法1回に消費する魔力が尋常じゃないほど多い。それにライトニングは相当癖のあるデバイスなんだ。だから今の、魔法に関して初心者君では使うことは難しい。だけど君がもつと魔法に関して極めたら、そのときはライトニングの方から・・・」

ユ

「そう・・・ですか・・・悔しいですけど、これで1つ魔法を学ぶ上での目標が出来ました。お父さんの形見、ライトニングを使えるようになりたい、ライトニングに認めてもらいたいってことです」

『It is possible to do surely some time if it is you. (あなたならいつか、きっとできますよ。)』

ユ

「ありがとう、ライトニング。で、デバイスはどうしましょう?」

河

「さつき鈴の攻撃に対して張ったシールドを見る限り、君の魔法はお母さんに近いものがあるから、恵美さんが昔使ってたデバイスを1回使ってみるのがいいかな。アレは魔力消費もそんなに多くはないし。今は局に返還中だから、返還を取り消してしばらく使わせて

あげよう。」

河

（ああ、けど書類の捏造とか大変だな〜よし、津久野に押し付け・
いや、人生は経験が大事だから書類の捏造を経験させるだけだ）

『I also think so.（私もそう思います）』

河

（どっちにI also think so.だ？）

ユ

「お母さんのデバイス・・・いったいどんなのだろう」

偉

「知りたい？」

ユ

「え？僕のお母さんのデバイスについて何か知ってるんですか？」

偉

「いや知らないけど、何か？」

ユ

「なら、何でそんなこと言うんですか？からかわないでください！」

偉

「これこれ、君のお母さんのデバイスについてはこれだよ」

偉鈴の指す空中にはディスプレイが、映っているものはもちろんの
如くユウリのお母さんのデバイス『ヒュギエアの杯』どうやら、
その話題になってからの一瞬で調べたらしい・・・恐るべき検索能
力だ

河

「おいおい、難波・・・管理局の機密事項を簡単に調べるなよ、ばれたら減給ものだぜ」

鈴

「お姉さま凄いです」

ユ

「空中に画面が浮かんでいるなんて魔法ってすごい！で、これがお母さんのデバイスなのか・・・」

3人が三人三色の反応を見せるなか、ディスプレイにはこういった内容のことが表示されていた

『ヒュギエイアの杯』

いつ作られたものかは、わからないが管理外97番世界で発掘されたロストロギア。常に零れることのない謎の液体（未解析）で満たされたこの杯の使い道は未だよく分かっておらず、過去にこれをデバイスとして使用していた魔導師・古市恵美二等空尉は液体を用いたの回復魔法や、液体の波面での探知魔法、液体での防御魔法etc・・・とさまざまな使い方をしていた。彼女曰く管理外97番世界の書物に登場する医神アスクレピオスの娘であるヒュギエイアの持ち物であると思われるようだ

正

「何じゃこりゃ！？ロストロギアだあ？ダメダメ、そんな危ねえもんユウリに持たせちゃダメだ！」

河

「何故だい？」

正

「ロストロギアなんて危ないもん使って、もしユウリが怪我したらどうすんだよ！責任とれんのか？」

ケ 「おいおいそれ、ロストロギアをデバイスに使ってる奴の言う台詞じゃないだろ・・・1人で核兵器なみの戦力のくせに」

ユ 「そ、そんなに危険なものなんですか？さつき、神話のアイテムって言われたけどいまいち実感が持てないです。三種の神器なんて実際に見たことないですし・・・」

河 「なら、教えて津久野先生！つてわけで説明終わったら自由にしてくれていいよ、じゃあ私はお先に失礼」

正 「おい顧問、ちょっと待った！なに人に仕事押し付けて自分は帰ろうとしてんだ！」

河 「今日はこの後、新任教師の飲み比、いや歓迎会があつて行かないやならないんだ。石切先生行きましょう！それに何事も経験だ！」

ケ 「という訳だ、俺と河内先生は他の先生との飲み比べに勝ち、一騎打ちをするつて男と男の熱い戦いがあるんだ、じゃあまたな少年」

正 「逃げやがった・・・つてそこ！部長と狭山、何帰ろうとしてんだ！」

偉&鈴

「お先です！」

ユ 「行っちゃった・・・さて、僕らも帰ろうか」

正

「ちくせう、けどユウリと部屋に2人きり・・・ムフフ・・・あんなことや、こんなことゲへへ・・・ユウリと2人熱い夜・・・サンキュー河内先生！この機会必ずものにしてみせる！」

そうニヤニヤしながら手をわきわきさせる正一を見たユウリは

ユ

「ぼ、僕用事あるから、ロ、ロストロギアについては、あとでメールして！」

身の危険を感じたのかユウリは走って部室を出て急いで下校する、
今までで一番早く走れたのではないかというぐらいで・・・

一方、部室に1人残された正一は・・・

正

「なんでだよ、なんでユウリは振り向いてくれないんだ！」

1人叫ぶその声は誰の耳にも入ることはなかった・・・

そして、正一からユウリに届いたメールにはこう
ロストロギアは危険で危なくてデンジャラス
と書いてあった

「今回もやってきました、瀬木学園HRの時間です」

正

「しくしく・・・」

ケ

「こいつはまだ立ち直っていないのか？禁断の扉を開けようとするから、自業自得だ」

ユ

「とりあえず、なんで泣いてるのは分からないけど、辛いことがあつたら相談してね？」

ケ

(辛い原因がこれじゃあな・・・)

正

「うおおおお！作者出てこいや！ちくしょう、俺がどうしてこんな不遇なんだよー！」

チング（作者）

「呼んだか？」

正

「貴様この外道、佐々木の弾となれ！」

チ

「はいはい禁止乙」

正

「ならば、マストドラだ！」

チ

「それも禁止だぜ？哀れな少年（笑）よ」

正orz

ケ

「うおっ、リアルでorzな奴とか始めてみた。写メっところ」

ユ
「作者、先生やりすぎです。少し身体冷やそうか（人生終了のお知らせ的な意味で）」

チ&ケ

「すいませんでした！」

ゴリゴリ

ユ（黒）

「頭すりつけなくてもいいですよ！土下座だけで、頭蓋骨陥没ぐらいの勢いで頭を地面にたたきつけるだけで」

全員

「黒！そしてテラこわっ！」

ユ

「河内先生後ろで何を？」

河

「おや、ばれたか」

正

「河内キサマ！」

河

「教師を呼び捨てにしちゃダメですよ？津久野君」

ユ&正

「知るか、問答無用！」

鈴

「お姉さま……」

偉

「鈴ちゃんは何があっても私が守る！」

ケ

「こっちはこっちで2人の世界に、向こうは河内先生の仕業にあー」

だこーだ言って」

チ

「グダグダっスね、困った時のリセット…リセットされるまでのわずかな時間で」

ユ

「次に向かって」

一同

「STEP UP!」

オカルト研究会（後編）（後書き）

忘れないように予約投稿しておきます

いざミッドチルダへ！（前書き）

『父親の形見はデバイスで』

『知らされた両親の過去』

『それらの事実を知ったとき』

『少年は新たな思いを胸に・・・』

『魔法少女リリカルなのはーThe generation of

new face』

いざミッドチルダへ！

―数日後・・・

正一

「ユウリ、河内先生が今日デバイスの返還申請に行くから、放課後部室来いだってさ」

今回の出来事は日常の何気ないひとことから始まった

ユウリ

「お母さんが使ってたデバイスか・・・なんだったけ？ヒユギ、ヒユギなんとか？」

正

「ヒユギエアの杯な・・・そんな記憶力で大丈夫か？」

ユ

「大丈夫だ問題ない」

なんて、たわいもない話をしていると

『Master Tsukune, should we not go early? (つくねの旦那、早く行った方がいいんじゃないですか)』

どこからともなく声が聞こえる

正

「ちょっと、おまっ！ミニヨル、勝手にしゃべるな一般人もいるだろ

が！それに、何回俺の名前を間違える？俺はつくねでも九十九でも造りでもなく津久野だ！」

『It understands, master Tsukuyo mi (分かってますよ、月読命の旦那)』

正

「だ・か・ら、俺は津久野だ！」

『Yes, it is, and has understood, master Tsukuno. (はいはい、分かりましたよ、津久野の旦那)』

正

「ならいい、でユウリ」

ユ

「正一は津久野で、つくねじゃなく九十九で・・・あれ？もう何が何だか分からない！」

正

「こっちはこっちで処理しきれず、混乱か・・・とりあえず、こいつを部屋に連れて行くか」

― 部屋

正

「うーす」

ケンジ

「遅い、遅すぎる！おかげでこっちはこの甘々な雰囲気負けそう

になったじゃねえか！」

そう指差す先には、購買で買ったと思われるスイーツをお互いにア
ーンしあう、偉鈴と鈴の姿が・・・

正

「ご愁傷さまで・・・いや、この雰囲気は、ユウリとさりげなくア
ーンなんて・・・ヤヴァイ想像しただけで、ちよつと購買行つてく
る！ユウリは預けるが、手を出したら分かってるな？いつてきます」
ケ

「誰が男に手を出すか・・・貴方とは違うんです、つて言っても誰
も聞いてないよな」古市もこの状況だし、河内先生は転送ポートの
魔改造で忙しそうだし、女子2人はあの雰囲気だしな・・・ヤヴァ
イ、あのユリユリな雰囲気負けそうだけ、つて訳で退散するか部
室前に・・・」

そう扉に手を掛けるのが早いか、開くのが早いか

正

「ちくせう！購買の営業時間すぎてやがった」

正 o r z

偉鈴

「私たちの愛の勝利ね、鈴」

鈴

「はいお姉さま」

ユ

「・・・いつもこんな感じなんですか？」

ケ

「ああ、残念ながらな」

河

「おや？いつの間にか古市君が来てるじゃないか、石切先生教えてくださいよ、待たせるなんて私のポリシーに反します。減給にしますよ？」

ケ

「すみませんでした、次はこの命に代えても必ズ」

河

「ええと古市君、今日は時空管理局地上本部のあるミッドチルダという世界に行つてヒュギエイアの杯の返還申請を取り消してもらいに行きます、他のメンバーも恩師たちに挨拶に行くので仲間内の小旅行だと思つてもらえればいいよ」

鈴

「私、親から教導受けましたし、ここが初所属なんで向こうに恩師なんていませんよ？」

河

「大丈夫だよ、古市君の魔力運用の基礎教導のために恩師を一箇所に集まつてもらつてるから、恩師vsうちで模擬戦やるから経験不足の鈴にもいいと思うよ」

ケ

「高町一等空尉との模擬戦・・・嫌だな、あの人との模擬戦で何回撃墜されて、地面に叩きつけられたか・・・」

ユ

「そんなに模擬戦つて危険なんですか!？」

河

「デバイスが似てるから、戦闘スタイルも近いんじゃないかってヴィータさんとよくマッチアップさせられたが、俺はデバイスで人を殴らないつてのにな・・・」

ユ

「デバイスで殴る・・・痛そう!」

偉

「なぜか執務官のランスターさんに指導受けたけど、あの幻術ウザ
いっただらありゃしない！あとたまにきたナカジマって人とのコンビ
プレイ凶悪すぎるよ、2対1でも分が悪いつてのに……」

ユ

「ご愁傷様です……でも、魔法つていろいろあるんですね、こな
いだの狭山さんの槍も魔法みたいですし……魔法らしい魔法なん
て河内先生が何もないところからムチを創り出したのと、デバイス
のセットアップぐらいですよ？」

ケ

「あれだ、高町一尉は魔法じゃなく魔”砲”って揶揄されることも
あるからな、大砲の砲な……」

ユ

「ハハハ……」

ユ

(魔法使いは敵に回したらダメだね……)

河

「くだらない話は後にして、とつとと行くべ〜」

全員

「了解しました！」

河内

「座標指定、3・1415926535……時空の向いっついにいざ
行かん！次元の果てまで行って……」

ユ以外

「Q」

ユ 「えっ、何なのそのノリ！僕が間違ってるの？」

正 「いや、お前が正しい……そのうち慣れるしお前もこうなる、この空気に当てられてな……」

ユ 「そんなの慣れたくない！僕は帰る、真つ当な世界へ！」

偉

「ごめん、それムリ」

鈴

「ムリなのですよ」

ケ

「こんなのに慣れた自分が怖い……あの娘はこの部隊に入れさせちゃダメだ、あの娘に悪影響を及ぼしそうだ。あの娘だけは俺が絶対に守るそう約束したからな……」

そう言ってる間に景色は教室から変わり

???

「久しぶり、彼女は元気？」

ケ

「高町一等空尉、お久しぶりです。舞花とは頻繁に連絡を取ってますけど、堺家の方で元気にやってるみたいですよ」

なのは

「そう……よかった〜なんか、帰ってから実家がバタバタしてたって聞いたからきになったんだ。今日の模擬戦は負けないよ」

ケ 「こつちもです」

????

「おお、正一少し見ないうちにまたでっかくなつたな。久々にぶつ叩くぜ、覚悟しろよ」

正

「それって、ヴィータさんが育ってないからそう思うだけじゃ？」
ヴィータ

「言い残すことは？」

な

「まあまあヴィータちゃん落ち着いて、戦つのは模擬戦でね」

ヴ

「ああ、わりい。つい熱くなつちまつた」

ユ

「子供？」

ヴ

「わりい、なのは今度は押さえ切れそうにない・・・」

な

「ダメだよ、ヴィータちゃん！もしかして、お話ししたい？」

ヴ

「ああ、なんかきゆうげきにあかりがうせてきたな（棒読み）」

ユ

「すみません、子供って言って」

正

「ユウリ、謝る必要ないぜ。どっちに非があるかは模擬戦で決めるからな、揉め事は模擬戦で白黒つける！それがここでのルールだ」

ユ

「主張は相手を倒して無理矢理通す・・・僕はそんなの苦手だな」

正

「この考えはその悪mいや、なのはさんが子供のころから魔導師

やってて編み出した理論らしい。戦闘で勝つたらお話し聞かせてと
相手をフルボッコにする・・・管理局の白い悪魔は伊達じゃない」
な

「津久野君？ちよつとおしゃべりがすぎてるんじゃないかな？ちよ
つと隊舎裏行こうか・・・そして、お話し（処刑）しよう？」

正

「いや、冗談ですよ？」

な

「問答無用、スターライト」

フェイト

「なのはの悪口は許さない、雷光一閃プラスマザンバー」

はやて

「なんや面白そうなことしてるな、うちも混ぜてえや。響け終焉の

笛ラグナロク」

な・フェ・は

「ブレイカー！」

正

「う、うわああああ！」

ガッ

は

「なっ！」

フェ

「そんな・・・」

な

「この砲撃を防ぐなんて・・・」

正

「ユ、ユウリ？」

ユ

「ふう、間に合った〜この間の魔法、ちょっと練習してみたんだ。けど、ここまで上手くいくななんて思ってなかったよ」

河

「ふうん、この障壁ほんとに恵美さんみたいだな・・・古市君、まずはデバイスの申請に行こうか。デバイスなしでの魔力行使は大変だからね。では、教官さん達うちの者をお願いします」

な

「わかりました、みんなの実力も把握したいので最初から全力全開でやらせていただきます」

ー申請サイドー

河

「それにしても、障壁の練習っていったいどんなことをしたんだい？」

ユ

「寝転んでボールを投げて、落ちてきたのを障壁で防ぐってことですよ？でも、正直あんな魔法も防げるなんて予想外です」

河

「その練習法お母さんに教わったのかい？あの人も似たようなことやってたけど・・・」

ユ

「へー、そうなんですか〜お母さんも似たようなことを・・・似たようなことを考えるなんて、親子って似るんですかね？」

河

「あの人は最後の方は両手両足を縛って、念じるだけで障壁を張って君のお父さんの砲撃を防いでたけどね・・・」

ユ

「なにやってるんですか!？」

河

「いやあ、なんでも念じるだけで自由自在に障壁を設置する、とか
なんとか言ってた気がするよ・・・障壁を防御だけじゃなく攻撃に
利用した人はあの人ぐらいじゃないかな、ハハハ」

ユ

「無茶苦茶ですね、ハハハ」

「地球」

恵美

「くしゅん、風邪かしら気をつけないとね」

「模擬戦サイド」

ティアナ

「すみません、遅くなりました！」

な

「いいよ、執務官は忙しいからね・・・もしかしてだけど、フェイ
トちゃんがこっち来た後処理とかじゃないよね？」

テイ

「うっ」

な

「そっつんだね・・・フェイトちゃんお話ししようか・・・」

フェ

「やつて！じゃなかった、ひい（棒読み）」

な

「はやてちゃんはなんでここにいるのかな？まさか・・・」
は

「うちはちゃんと仕事かたずけたよ、シグナムが模擬戦したそうにしてたから、一部押し付けてきたけど（^| ^;）」

偉

「ティアナさん、負けませんよ！幻影なんてすべて打ち抜けば問題ないですから。まぐれで本物打ち抜くかもしれませんよ？」

テイ

「あいかかわらず、質より量のゴリ押ししてくるのね・・・進化したフエイクシルエット・ツヴァイにはきかないわよ」

偉

「そう言っられるのもいまのうちですよ。私と鈴、貴女とスバルさんのコンビネーションどっちがすごいかわ黒つけましよう！」

テイ

「ごめん、それムリ。今日はスバル来れないからフェイトさんとコンビ組むのよ・・・」

偉

「そんな・・・私は何の為にここまで、来たの・・・？」

テイ

「師弟対決じゃないの？」

偉

「違う！私と鈴の愛を見せつけに来たのよ！」

鈴

「来たですよ！」

テイ

「なんなの・・・コイツ等？」

ケ

「ランスターさん、コイツ等のこれはいつものことだから気にしないでいいですよ」

テイ

「分かったわ、はぁ・・・」
な

「ま、まあ、模擬戦始めようか(汗)」

―申請サイド―

河

「見えてきたよ、あそこが今日の目的地・探索指定遺失物管理課第1保管庫だよ」

ユ

「あそこに、お母さんのデバイスが・・・でも、ロストロギアって危険な物なんじゃ？」

河

「だから、こうやって嚴重に保管しているのさ。ここからロストロギアを盗める奴なんて、まずいないからね。正面から突破できる魔導師は少数だがいるけどね・・・さっきの高町とかハラウンとか・・・いや、アイツ等なら壁壊せんじゃないか？これは・・・壁補強の申請しといた方がいいんじゃないか？」

ユ

「そんな壁壊せる人と模擬戦なんて正一たち死にますよ！」

河

「大丈夫だよ、彼女達は強いからちゃんと手加減してくれるよ。さあ、なかに入ろう」

ウィーン

局員A

河 「こんにちは、今日はどういったご用件ですか？」

「ロストロギア・ヒュギエアの杯の貸し出し申請だ。それで、これが持ち主である古市恵美さんの依頼書だ」

局員A

「筆跡鑑定するので、少々おまちください」

ユ

「お母さんにいつ会ったんですか？」

河

「この間の土日に君が津久野君のうちに遊びに行ってる間にだよ」

ユ

「あの日ですか、たしかにお客さんが来たって言ってました」

河

（恵美さんにはデバイスを君に使わせるなんて言ってないけどね、本当はただの研究だと言ったんだが・・・この際仕方ないよな、あの人はユウリ君を局員にしたくないみたいだしな）

局員A

「鑑定終了、本人の筆跡と確認しました。封印解除などを行いますので、また後ほど取りに来てください」

ところ変わって

河

「グイータ、悪いが模擬戦前にこの子を叩いてくれないか？」

グイ

「いいのか？」

ユ

「MATTER!」

河

「いいよ、まずは習うより慣れるだ」

ヴィ

「さっきの恨み！ラケーテンハンマー！」

『Raketenhammer!』

ユ

「ひい」

ガキッ

ヴィ

「ガキッ？誰がガキだ、コノヤロー！ぶち抜け！」

『Cartridge load!』

ギ・ギ・ギ、ズルッ

ヴィ

「うわあああ！」

ドサッ

ヴィ

「いたた。おい、いきなりシールドをずらすな！もし、それで怪我したらどーすんだよ！」

ユ

「すみません、集中力が・・・」

ヴィ

「言い訳するんじ・・・いや、まだお前は魔法を知ってから短いから仕方ないな、わりい」

ユ

「いえ、こちらこそ」

正

「いいぞ、ユウリよくやった！」

ヴィ

「なんだと、てめえ！なのは、とつと模擬戦始めんぞ！」
な

「じゃあ、チーム元六課対チームオカ研スタート！」

私立瀬木学園HR

ユ

「おい、作者！」

チング（作者）

「はい？」

ユ

「今回、なんで僕あんなに危ない目にあっただの？」

チ

「チートのお披露目会？」

ユ

「僕ってチート主人公なの？」

チ

「魔力量と防御力、補助魔法だけな、攻撃魔法はからっきしだぜ！
若干、次回のネタバレだけどな！」

ユ

「なんで、誇らしげ？あと、ネタバレして大丈夫？」

チ

「理由は特にない&大丈夫だ、問題ない。ネタバレしても、読者に
「最近アニメが面白い」並みの衝撃を与える！きっと・・・」

ユ

「自信ないんかい！」

偉

「ところで、いつまで待たせるんですか？作者、貴方は蜂の巣にされたのですか？」

チ

「ダメ、君の戦闘はネタバレだから」

偉

「なら、鈴ならいいのね？」

チ

「うん、ってちゃうわ！」

鈴

「S・SD！」

ガシッ

「なっ！バインド？」

ユ

「バインドは通信講座で覚えました。」

チ

「グボア」

K・O・

偉&鈴

「悪は常に滅びるのよ！」

ユ

「先輩は何もやってないですよ！」

偉

「貴方もあなりたい？」

ユ

「すみませんでした！」

偉

「まあ、スッキリしたから帰るわ」

ユ

「ご苦労様です、姉御！」

偉

「ああ、これからも精進なさい」

ユ

「イエス、ユアハイネス」

こんなだけど続く

このHRは本編と全く関係ありません、ユウリは通信講座で魔法を学んだわけじゃないですよ

いざミッドチルダへ！（後書き）

書き終わり次第、随時更新すると言っておきながら更新忘れてました。これからは、書き終わり次第予約投稿できるようがんばります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0417s/>

魔法少女リリカルなのは-The generation of new face

2011年10月8日15時44分発行